イーヴリン・ウォーのユーゴスラヴィア駐留
― *Unconditional Surrender* に見る戦争と倫理―

有為楠　香

Ⅰ．序

本論文では、1944 年から 45 年、第二次世界大戦時にユーゴスラヴィアに軍人として赴いたイーヴリン・ウォー（Evelyn Waugh 1903-1966）の経験と、彼の戦争文学との関わりについて考察する。検討する作品は、彼の大戦三部作 *Sword of Honour* の第三部 *Unconditional Surrender* (1961) であるが、彼の政治的発言や寄稿にも考察を加える。

ウォーは 1920 年代に小説家としてデビュー。初期作品では当時のイギリス上流社会や世界の時事問題に風刺を交えた作風で人気を博した。しかし 1930 年にカトリックに改宗して以降、彼の小説には登場人物の精神的苦悩を重視する作風が強まる。とりわけ、第二次世界大戦で軍人としてヨーロッパ各地の戦場を巡って以降、彼の作品には信仰に関する深い考察が見られる。

しかしウォーの戦後作品、とくに戦争文学と彼自身の戦争体験との関わりについては未だ研究が多くない。セリーナ・ヘイスティングス（Selina Hastings）を始めとしたウォーの伝記には必ず従軍体験の記述が含まれており、近年ではドナート・ギャラガー（Donat Gallagher）によるウォーの従軍時代に射程を絞った研究書があるが、本論文はウォーの戦場体験を表した軍事レポートおよび新聞寄稿と、文学である *Sword of Honour* の違いに注目する。単に体験記録から小説に至るまでのウォーの足跡をたどるのみでなく、従軍体験が彼の執筆にどのような影響を与えたかを明らかにする。す

なわち、カトリックとしての己の立場を明白にし、国家のプロパガンダと自らの体験した戦場との落差を広く世に問うようになったことである。本論文ではこの件を踏まえ、ウォーの作品の読解を試みる。

Ⅱ．第二次世界大戦とウォーのユーゴスラヴィア体験

まず、第二次大戦時のユーゴスラヴィアにおけるウォーの活動の足跡を確認する。第一次世界大戦開戦時には十一歳であり、とくに戦争の知らせに興奮する少年だったウォーは（Eade 30-31）、成人後に再び始まった大戦には積極的に参加する心積もりだった。よって戦争が始まるとすぐさま士官登用訓練に応募し、1939 年 9 月にイギリス海軍の士官に任用される。1941 年 5 月には、英独の激戦が行われたクレタ島の戦いに派遣されている。しかし 1943 年末にパラシュート訓練中に怪我を負い、療養期間を利用して *Brideshead Revisited* を執筆した。その後、1944 年 7 月にユーゴスラヴィアで現地の軍隊と折衝を行う任務を受ける。

ユーゴスラヴィア（以下ユーゴ[1]）は大戦中期の 1941 年 4 月、枢軸軍に国土全域を分割占領され、クロアチア独立国という傀儡政権を立てられていた。これに対して現地のユーゴスラヴィア共産党は国民に武装行動を呼びかけ、同年夏にヨシプ・ブロズ・チトー（Josip Broz Tito）を指導者に立てたパルチザン（共産党軍）が一斉蜂起を行う。蜂起から二年でチトーとパルチザンは多数の土地の奪回に成功し、国内外の知識人から大きな支持を得た。この状況を良しと見ていたのが、ウィンストン・チャーチル（Winston Churchill）率いるイギリス政府だった。1943 年 12 月に行われたテヘラン会議に出席したチトーに、連合軍は正式な援助を申し出る。さらにチャーチルはチトーに対し、大戦初期にロンドンに亡命していた旧ユーゴ政権との連立政権を提案した。これはチトーと彼の共産党の背後にいるソ連のスターリン（Joseph Stalin）との関係を断ち、ユーゴをよりイギリス側に引き寄せ

るためであった。

枢軸国に承認されたクロアチア独立国内では、現地民であるセルビア人の虐殺・セルビア正教会の弾圧・ユダヤ人の収容所隔離と大量殺人が続いていた。これに対して武力蜂起したパルチザンは枢軸軍から土地を奪い返した後、各区内に人民解放委員会という権力機関を置いていた。しかしこれらはユーゴ国内の各地に点在した地方組織であり、統一的行政システムではなかった。よって各地の治安はしばしば現場の判断に任されており、後にウォーが記録するような犯罪も頻繁に起きることになる。

1944 年 7 月、陸軍の情報将校に任官されたウォーは、チャーチル首相の長男であるランドルフ（Randolph Churchill）と共にユーゴへ出発する。そこでチトーと初めて顔を合わせた後、およそ半年間各地を転々としながらユーゴ国内に留まる。ランドルフ・チャーチルとウォーは 1920 年代からの友人であり、ウォーは小説 *Put Out More Flags* (1942) ではランドルフに献辞を捧げている。その関係が続いていたのは事実であるが、上に述べたチャーチルの目論見をあわせると、偶然や友情だけで任務を受けたとは考えがたい。つまりウォーは、チャーチルの意図したイギリスによるユーゴ支配の足がかりをつくる組織の一員だったと考えられる。とりわけウォーはカトリック作家として広く評判を得ていた人物であり、現地の宗教組織との調停役を期待されていた可能性が高い（Gallagher 116）。

ユーゴにおけるイギリス軍は、負傷兵の救護と国内の収容所から解放されたユダヤ人の救出を行っていた。ウォーは 1944 年の秋から戦地訪問を始め、ときにドイツ軍の空襲を受けながら、イギリス軍とパルチザンとの共同作戦を視察した。12 月からは首都のドブロヴニクに勤め、イギリス軍の代表団とパルチザンの連絡将校となる。この任務は政治交渉だけでなく、現地の庶民の生活に関する陳情も受ける立場であり、頻繁に移動しつつ軍と一般市民の両方に対応する激務の日々だったことがウォーの日記からわかる（*DEW* 628-644）。しかもこの時期、ウォーは多くの教会指導者と会っていた。そし

て彼が聞かされたのは、枢軸国のみならず、パルチザンたちが宗教者たちに加えていた暴行と虐殺の報告だった（*DEW* 635, 642）。

最終的に大戦終結後の 1945 年 11 月、チトーを首相とするユーゴスラヴィア連邦人民共和国が建国される。これによってチャーチルが望んでいたような、イギリス政府による戦後ユーゴ支配の夢は消滅した。

Ⅲ．ウォーの軍事レポート

ウォーは 1945 年 2 月にユーゴを出国し、イタリアのバーリに滞在しながら、現地での体験を軍上層部に提出するレポートの作成に取り掛かった。ウォーがユーゴとチトーに関する所感を発表し始めたのはこの軍事レポートが最初であり、後々の彼の文学に大きな影響を与えていく。本章では、このレポートの成り立ちと社会の反応、およびそこに託されたウォーの真意を明らかにする。

ウォーのレポートは、Christopher Sykes による伝記で抜粋を読むことができる[2]。まずウォーは序文で以下のように述べている。

> Whatever changes may have taken place recently in the heart of Russia, the Communists of Yugoslavia still profess a pure Marxist faith.
>
> There is a fundamental, irreconcilable difference (which it is not the purpose of this report to examine in detail) between communism and Christianity in their conceptions of the nature and purpose of man . . . .
>
> The help given to the National Liberation movement by Great Britain has been extensive and, in the opinion of many observers, decisive. Some responsibility therefore rests with

> Great Britain for the consequence of its success. (Quoted in Sykes 370)

ここでウォーは、共産主義とキリスト教の間には、人間の天性と存在目的について根本的な、相容れない違いがあると考えているものの、今後のユーゴの行末に関してイギリスにはある程度責任が存在すると述べている。

そしてレポートの主体であり、「教会とパルチザン」および「パルチザンと正教会」と題した章では、カトリック教会と共産主義とは一切相容れない正反対の思想であることを再度強調している。さらに、チトーが現地の宗教的多数派であるセルビア正教会に対してはカトリックに対する弾圧よりも手心を加えていた、とウォーは述べ、それはソ連との関係においてもバルカン半島を制圧する上でも、正教会の支持を取り付けることが重要であったからだと論じている。そしてレポートの結論部においては、ウォーの批判対象はチトーを超えてイギリス政府に及ぶ。

> Great Britain has given great assistance to the establishment of a régime which threatens to destroy the Catholic Faith in a region where there are now some 5,000,000 Catholics. There is no hope for them from inside their country. Marshal Tito has paid lip-service to many liberal principles, including that of freedom of worship. . . . He may still be amenable to advice from his powerful Allies. If he were informed that the position of the Church under his rule is causing alarm, that it is not the policy of the Allies to destroy one illiberal régime in Europe in order to substitute another, . . . he might be induced to modify his policy far enough to give the Church a chance of life. (Quoted in Sykes 372)

ウォーは、五百万人のカトリックがいる地域に対してカトリック信仰を撲滅すると脅している国家の設立にイギリスが大きく手を貸したことを指摘し、カトリック絶滅を意図して弾圧を行ったチトーと、彼に援助を差し伸べたイギリス政府をはっきりと批判している。ウォーが糾弾するのは、チトーは信教の自由を含むさまざまなリベラル的態度を示してイギリスなどの連合国をだましていたこと、また自国のカトリックが難なくひねりつぶせる存在であるからこそ、連合国に対して自由主義国家に援助するという名目を与えたことである。だからこそウォーは、もしも連合国がチトーに働きかければ、教会に生きのびる手段を与えるべく政策を修正するだろうと述べている。よってこのレポートは、確かにパルチザン批判に満ちてはいるが、おおもとではイギリスの外交政策の誤りを指摘するレポートであり、もしもイギリスが国策どおりにユーゴ支配を続けたいのなら、カトリックの保護をチトーに認めさせるべきだという進言でもあった。

1945 年 3 月にレポートは提出され、これを受け取った外務省は甚だ気分を害した（Sykes 373）。ウォーのレポートが与える影響はイギリスとユーゴとの関係を超え、ユーゴの背後にいる、スターリン率いるソ連との国際関係に直結していたからである。国策に意見したかどでウォーを非公開の軍法会議にかけることもありえたが、小説家たる本人の知名度とマスコミ報道の過熱を考えるとそれもはばかられた。最終的には、中立的判断に基づいていないという理由で軍はレポートの公表を却下した（Gallagher 125）。

失望したウォーは、二ヶ月後の 1945 年 5 月、『タイムズ』に “A British Soldier Lately in Yugoslavia” の筆名で二回寄稿し、再度パルチザンの虐殺行為を批判した。掲載時は匿名であったが、これらの寄稿はイーヴリン・ウォーの著作集に収められている。一回目の寄稿でウォーは、チトー配下のパルチザンが、イギリスが保護するべきであった人々に暴行を加えていたことを書いている。

> Sir – There is evident danger that the urgent and human problem of the disposition of the former Italian and Austrian territories claimed by Marshal Tito may be treated as an academic matter to be settled at leisure for ethnologists, while, in fact, the Slav partisans are in effective possession, busily shooting and deporting people who are legally under our protection. (*EAR* 282-283)

さらに寄稿の後半では、チトー体制下の、秘密警察・プロパガンダ組織・政敵の殺害・市民の理由なき逮捕などに触れ、これらをナチズム的特徴と見なしている。

> If, when the truth is published, it is revealed that the regime of Marshal Tito has all the characteristics of Nazism – a secret, political police, an unscrupulous propaganda bureau, judicial murders of political opponents, the regimentation of children into fanatical, hero-worshipping gangs, the arrest and disappearance of civilians for no other reason than that they spoke English and had exchanged civilities with British troops, . . . (*EAR* 283)

二回目の寄稿では加えて、シベニク・スプリト・ドブロブニクなど、クロアチア地方諸都市での、キリスト教聖職者の殺害記録を挙げた。

> I have ‘studied the facts’ of the treatment of this offence in a few dioceses. In Sibonik [sic] eight priests were killed, in Split ten, in Dubrovnik fourteen, in the Franciscan Province of the Redeemer twenty-three, in Mostar forty-five. These figures apply to a small

> area up to the end of February only. (*EAR* 284)

しかし、イギリスの世論を動かすことはできないまま時は過ぎた。ウォーはこの後再び小説家として、次作 *Helena* (1950) の資料集めに入っている。

Ⅳ. 小論「不名誉な客人」

ウォーが再度チトーの問題に触れたのは 1952 年のことだった。その年の 9 月、保守党のアンソニー・イーデン（Anthony Eden）首相がユーゴを訪問、同時にイギリス政府がチトーを国賓としてイギリスに招待することが確定したのである。それを知ったウォーは、同年 11 月 30 日付の『サンデー・エクスプレス』に 小論「不名誉な客人」（“Our Guest of Dishonour”）を寄稿し、今度はイーヴリン・ウォーの署名を入れた。ウォーはこのたびも、イギリスの援助を得てドイツに勝利したチトーが、すぐさまソ連と手を結んで国内の虐殺に手を染めたことを書いている。また聖職者の殺害にも触れている。

> Tito is seeking to extirpate Christianity in Yugoslavia. Make no mistake about it. He is not squabbling with the Vatican about rights and privileges. Orthodox as well as Catholics are doomed if his rule continues. He has not, except in early days when partisan bands roamed the country murdering priests at will, used the same sensational violence as his Hungarian neighbours. But the aim is identical, as logically it must be in a regime which boasts itself as the only true-model Leninist state. (*EAR* 427)

だが今回のウォーは、戦時中のことには必要以上に深入りせず、現在のチトーを弾劾している。この頃ユーゴでは、カトリック司教のアロイジエ・ステピナツ（Aloysius Stepinac）が、ナチスの傀儡政権に協力していたか否かを巡る裁判が 40 年代から継続して行われており、国内のカトリック教徒は政府と真っ向から対立していた。また 1952 年 1 月からユーゴでは公教育における宗教教育が全面禁止されていた（長島 7-8）。ウォーはこの事実を鑑みて、キリスト教国家であるイギリスが何故、キリスト者だけでなく戦時はユダヤ人すらも迫害したチトー（“a notorious Jew-baiter” (*EAR* 427)）を、国賓として迎えられるのかと説いた。

> No doubt, if Tito comes, a crowd will assemble, as it will for any notoriety, and no doubt there will be some cheering. But let Mr Eden not think that his guest is welcome. We are not given to breaking windows and throwing stink-bombs, we English Christians. We refuse to learn the ugly modern lesson that nothing succeeds except conspiracy and violence. No doubt the deplorable event will pass off without Mr Eden's guest [Tito] being aware that numberless heads are bowed in national dishonour and in prayer for the frustration of all his ambitions. (*EAR* 428)

おそらくイーデンの賓客は、多くのイギリス人が国家の不名誉を嘆き、彼のあらゆる野望の頓挫を祈って頭を垂れていることに気づかぬまま、嘆かわしい式典は過ぎていくだろう、というウォーの怒りを込めた寄稿は、軍事レポートや以前の匿名での寄稿と違い、時事問題と直結していることから、世論に大きな波紋を生み出した。結局 1953 年 3 月にチトーの訪英は実行されたものの、ウォーの下には新聞読者からの賛同の声が舞い込んだ。この勢い

で、彼に多数の左派政治家を弾劾してほしいという訴えも寄せられたが(Gallagher 132)、ウォーは断っている。彼はあくまでカトリックの立場から宗教を迫害する者を批判したかったのであり、大の共産主義嫌いにもかかわらず、政治論客として名を上げる気はなかったのである。

次に彼がこの件に触れるのは、1961 年、彼の文学作品を通してとなる。軍事レポートと政権批判の論考を通じて伝えようとしたウォーの真意は、文学を通してどのように止揚されているのかを以下で検討する。

Ⅴ．虚構と現実のユーゴ：*Unconditional Surrender* のユーゴ描写

1961 年にウォーは小説 *Unconditional Surrender* を著した。これはイギリス陸軍兵士ガイ・クラウチバック（Guy Crouchback）が、国外の戦場を転々としながら、英雄としての名誉と現実の戦争との苦い落差を噛みしめるうちに、カトリックの信仰を見つめるようになる *Sword of Honour* シリーズの最終作、第三部である。

Sword of Honour 全編において、主人公ガイの第二次世界大戦時の軍歴はウォー自身のものとオーバーラップしている。例を挙げると、一民間人としてイタリアで暮らしていたガイは、英独の戦線が開かれたニュースを聞くと、居ても立っても居られずイギリスに帰国して軍に参加しようとするのだが、三十代半ばでまったく従軍経験がない彼を採用してくれる部隊はどこにもない。何度も採用申請を断られた後に偶然ハルバディア連隊（Royal Corps of Halberdiers）の訓練コースに入れてもらえることになる。この描写は、ウォー自身の年齢および採用申請を断られ続けた経験に即している。また、1941 年の夏のクレタ島の戦いは、*Sword of Honour* の第二部 *Officers and Gentlemen* のハイライトであるが、指揮系統の混乱と悲惨な飢餓に見舞われたイギリス軍や、ドイツ軍の空襲をかいくぐって島の外へ脱出する兵士たちの様子は、実際にその戦場を目にしたウォー自身の体験であ

る。よって物語はほぼ作者ウォーの目から見た第二次世界大戦をたどる内容ではあるものの、ただ主人公一人の視野にとどまることなく、大勢の軍人・市民・政治家・ジャーナリスト・スコットランドの民族主義者に至るまで、第二次世界大戦に接したイギリス人をさまざまな角度から叙述している。

とりわけ全編にわたって書かれるのが、戦時における理想と現実の落差である。戦時における理想とは、それに魅せられて戦場に向かう兵士たちが目指す英雄像である。だが実際には、世論を操作しようと企てるジャーナリストが創作した架空の英雄をも含む、存在しない幻想のことでもある。そして現実とは、そのような理想に踊らされた人々が実際に体験する、神話や伝説とは似ても似つかない泥臭い混乱としての戦闘である。あるいは政治的・経済的利益のために昨日の敵を今日の友として同盟を結ぶことを恥じない、政府首脳の二枚舌である。この理想と現実の間を六年間さまよい、最初は単純な愛国心と英雄崇拝の心情から戦場に身を投じたガイが、真に戦場で人間がなすべきことを理解していく物語が、*Sword of Honour* である。

その第三部 *Unconditional Surrender* において、ウォーは、四十才の将校となった主人公ガイに、自分と同じユーゴ駐留の任務を与える。前任の男は神経衰弱を理由に病院送りになった士官であり、引き継ぎの際、ガイに次のように忠告する。

> 'The comrades are a bloody-minded lot of bastards,' he [the officer whom Guy succeeded] had said. 'Don't keep any copies of signals in clear. Bakic [Croatian interpreter] reads everything. And don't say anything in front of him you don't want repeated.' (*SH* 644)

「こういう所に送られてくるには場違いな奴」("wrong sort of chap to send to a place like this") (*SH* 644) と周囲に言われていたこの士官だが、病人

のうわごとと思われた彼の言葉は、後に大きな意味を持つ。ユーゴは決してイギリスに協力的な土地ではなく、盗聴と背信がはびこる敵地に近いことが明らかとなるからである。

ガイの任務は、これもウォーと同じく、現地のパルチザンとイギリス軍を協力させるために調停を行うことであった。上述したとおり、チャーチルが発案したイギリスのユーゴ援助は戦後の植民地化を見据えたものであり、パルチザンたちも当然それを肌感覚で理解していた。したがって名目上は協力体制にあるとしても、イギリス軍とパルチザンは決して一枚岩ではない。前任士官が現地人のスパイ行為に過剰に敏感になっていたように書かれる理由は、そのような歴史的背景をもとにしている。

そんな中ガイは、軍の任務と離れたところで、移動中のユダヤ人グループと出会う。彼らはユーゴがナチスドイツの支配下にあった頃は虐殺を経験し、今はイタリアに脱出したいので、軍用飛行機を使わせてほしいとガイに陳情する (SH 648)。当然すぐにそれを認めるわけにはいかないものの、この事態に自分のキリスト教徒としての使命を感じたガイは、ユーゴにいる間一人でも多くの難民を助けようと決意する。

しかしこのようなガイの決意は一見人道的であっても、伴うふるまいの浅はかさが、イギリス・ユーゴのどちらにとっても危機となる場面が訪れる。ある日ガイの下に、ロンドンの空襲で妻が死亡したという知らせが入る。彼は駐留中である現地のカトリック教会で彼女のためにミサを挙げてもらおうと、神父と交渉する。しかし現地人である神父とは言葉が通じないため、ガイはカトリックどうしの共通語であるラテン語を使用して神父と話す（SH 668）。しかしそのような秘密の言語でのやり取りは、ともに共産主義者によく思われていないカトリック聖職者とイギリス人の怪しい取引であると疑われ、ガイが帰ったあとに教会はパルチザンの襲撃を受けてしまう。ガイにその顛末を伝えた同僚のイギリス士官ディ・スーザ（De Souza）は、あまりにも思慮のない振る舞いだとしてガイをなじる。以下は二人の会話である。

> 'I [Guy] simply gave him the name of someone who's dead – what we call a "mass intention."'
>
> 'Yes, that's what the priest told them. They've had the priest up and examined him. The old boy's lucky not to be under arrest or worse. How could you be such an ass? He produced a bit of paper he said was your message. It had your name on it and nothing else.'
>
> 'Not mine. Someone in my family.'
>
> 'Well you can't expect the Commissar to distinguish, can you? He naturally thought the priest was trying to put something over on them. They searched the presbytery but couldn't find anything incriminating, except some chocolate. They confiscated that of course, But they're suspicious still. You must have realized what the situation is here. . . .' (*SH* 676)

ディ・スーザはイギリス兵士であり、ユダヤ人でもあり、そして共産党員である。彼はガイの訓練時代からのほぼ唯一の友人だが、ユーゴに赴任して共産主義者であることを明かした後は以前のような親密なしぐさとはうってかわり、冷酷とも言える口調でガイのカトリック寄りの言動を戒めるようになる。

Ⅵ. カニイ夫人との会話

上の件は小さなエピソードに見えるが、ガイの浅はかさ、戦場という各国の利害が絡む場所での不用意なふるまいの前触れでもある。宗教と戦争が複雑に絡む地域で、同胞と見なした他者に肩入れすることは、巡り巡ってその他者に甚大な被害をもたらす可能性を伴う。そしてガイの浅慮は、より大き

な問題である、以下のユダヤ人難民の脱出に際して露呈される。

ガイが出国の手助けをしているユダヤ人たちの状況をここで振り返る。彼らはイタリア軍に支配されていたラブ島にあった強制収容所からの脱出者だった。ほとんどがスラヴ系ユダヤ人の中、幾人かは中央ヨーロッパからの難民である。パルチザンが土地を解放してからは収容所を出られたものの、パルチザンに強制徴用や投獄をされたり、あるいはドイツ軍に捕まったりと苦難を乗り越え、とうとう百人程度の生き残りとなった。いわば誰が支配者であろうが恒常的にユーゴの被差別民になっている人々が、このユダヤ人難民たちと言える。

このグループを率いているのは、電気技師の夫を持つカニイ夫人（Mme Kanii）という女性である。グループのうちガイとイタリア語を共通語として会話ができるのは彼女だけであり、自然と情報将校のガイはこの女性と親しくなる。ただし彼女の方は度重なる軍人たちの裏切りに出会い、ガイの親切に対してもやや懐疑的である。しかもガイは確かにユダヤ人を脱出させてくれたものの、当地のパルチザンとあまり仲が良くないことも見抜いており、ガイから過剰な思いやりを受けるのは多少迷惑に思う様子である。

最後のユダヤ人の出国許可がおりた後になっても、技師の夫がパルチザンに引き止められているため、カニイ夫人はユーゴに残っていた。その間にガイとカニイ夫人はこの戦争の成り立ちについて言葉を交わす。ガイがもうすぐイギリスに帰国する予定だと打ち明けると、登場時からずっと口が重かったカニイ夫人は、彼女の言葉の中でもっとも長い台詞を口にする。

> ‘Is there any place that is free from evil? It is too simple to say that only the Nazis wanted war. Those communists wanted it too. It was the only way in which they could come to power. Many of my people wanted it, to be revenged on the Germans, to hasten the creation of the national state. It seems to me there

> was a will to war, a death wish, everywhere. Even good men thought their private honour would be satisfied by war. They could assert their manhood by killing and being killed. They would accept hardships in recompense for having been selfish and lazy. Danger justified privilege. I knew Italians – not very many perhaps – who felt this. Were there none in England?'
>
> 'God forgive me,' said Guy. 'I was one of them.' (*SH* 702)

「良い人々でさえ、個人的な名誉が戦争で満たされると考えました。彼らは自分たちの男らしさを、殺し殺されることで主張できたのです」と語るカニイ夫人は、従軍を決意したときからガイにつきまとっていた名誉の問題を口にする。男たちは戦前に利己的で自堕落であったことの報いに、すすんで戦争という苦難を受け入れたのではないか、とカニイ夫人は語る。言外に、戦争で死ぬのは男とは限らないことに目をつぶって、との思いもあり得ただろう。カニイ夫人は特定の国民を批判するのではなく、ユダヤ人を含めてすべての人が戦争を望んでいたと言う。それに対しガイは「私もその一人だった」と告白する。会話描写はここで中断され、実際この日どのようにカニイ夫人とガイが別れたのかは示されない。ガイの告白にカニイ夫人がどう応答したのかもわからないが、もしかしたら初対面のときと同じ、「皮肉にしては悲しすぎる」"too doleful for irony"（*SH* 648）表情で、ガイの感傷を受け止めたのかもしれない。二人の語らいは、最後まで権力を持つ者と被統治者の感覚の乖離を縮めることはないのである。

しかしここでガイの言う「私もその一人だった」は、*Sword of Honour* 三部作を決算する言葉である。開戦時に十字軍時代の英雄サー・ロジャー（Sir Roger）に憧れ、聖戦を戦うべく軍に入った彼は、"guy"（男）の名が示すように、イギリス軍の一兵士に埋没していく。決して派手な軍功を立てることなく、カトリックの一士官としてヨーロッパの戦場を巡った彼の、終

戦間際に被差別者の一員と会話をして得た自己認識が、「私もその一人だった」、つまり戦争を望み、平時の怠惰の報いに殺戮を受け入れ、男らしさを証明したがった者たちの一人だったことに結実する。ガイがはっきりと口に出して認めることで、第二次世界大戦のあらゆる国策を覆う戦争と名誉の問題は、彼個人を超えて、「個人の名誉は戦いによって満たされる」と考えた人々全員の背負うべきものだということが示される。

そしてこの会話のあと、しばらくしてさらに悲劇的な事実が明かされる。ガイが後日知ったことでは、ユーゴのユダヤ人難民は全員脱出できたが、ただカニイ夫人と夫だけができなかったと言うのである。なぜならカニイ夫人は夫と一緒にパルチザンに処刑されたのだった。直接的な理由は夫が仕事のサボタージュを行ったからであるが、ガイと上記の会話を自宅で行ったことで、実は彼女がガイ自身の情婦と誤解されていたことをガイは知る。ガイが慈悲の心をもって尊重しようとした人物が、まさにそのガイの思いやりにより悲劇的な結末を迎えるという場面は、先述の教会のエピソードの繰返しである。

これより以前、ガイが難民を脱出させる高揚感に浮かされる描写がある。ユダヤ人を国外脱出させたモーゼに自らをなぞらえる場面である。

> It seemed to Guy, in the fanciful mood that his lonely state engendered, that he was playing an ancient, historic role as he went with Bakic to inform the Jews of their approaching exodus. He was Moses leading a people out of captivity. (*SH* 696)

敵意に囲まれた外国で孤独な心を癒やすためには、モーゼのような歴史的役割を果たしているという自負が必要だったのは確かだ。では、なぜウォーはこのように、己の分身のごとくユーゴに駐留させていた男が、完膚なきまでに己の自負を傷つけられ、最終的に現地に残酷な悲劇をもたらす小説を書

き上げたのか。確かにウォーは *Unconditional Surrender* において、パルチザンの猜疑心と頻繁な暴行を描いている。しかし注目すべきは、それらを導いたのはむしろ慈悲と対話を重んじるキリスト教徒として行動するガイの判断だと書いている点である。本論の最初に述べた軍事レポートや寄稿と *Unconditional Surrender* の違いは、後者においては、弱者へのパルチザンの暴行にはいつも主人公の善意が働いていることである。教会に対しても、カニイ夫人に対しても、ガイとしては戦争とは無縁の一キリスト教徒として行動しているつもりなのだが、そのような振る舞い自体が常に被害者を作り出してしまうのである。

これを見るとウォーは、単に己の戦争体験を文章化するだけの姿勢から脱却し、小説における因果関係を重視していると言えるだろう。その因果は、いつも主人公が良かれと思ってやった行動に端を発しているのである。このことは、平時からウォーが書いてきた、人間社会でしばしば起こる思いがけない皮肉な事態が、戦争においては一層シビアで取り返しのつかない結果を生み出すことを強調しているように考えられる。さらに軍人であるガイは無傷でユーゴから生還し、彼の代わりのように命を落とすのが無辜のユダヤ人夫婦であったことは、常に最も政治的に弱く武器を持たない者に暴力が降りかかることを示している。さらには、民主主義者・共産主義者・ローマンカトリック・ユダヤ教徒・軍人・民間人など、さまざまな人々が複雑に混じり合う戦争という状況において、彼らはけっして安易な結束には至れないという現実を表現していると考えられる。

Ⅶ. 結び

ではウォーの本意は究極的にどこに向かうのか、最後に考察をまとめる。*Unconditional Surrender* では、最も弱い者をたった一人救うことに価値がある、というキリスト教の原則が強調される。以下は、本作品の冒頭でガイ

の父親がガイに送った手紙の抜粋である。

> When you spoke of the Lateran Treaty did you consider how many souls may have been reconciled and have died at peace as the result of it? How many children may have been brought up in the faith who might have lived in ignorance? Quantitative judgements don't apply. If only one soul was saved that is full compensation for any amount of loss of 'face'. (*SH* 491)

もしもひとつの魂が救われるなら、それはどれだけの面子が失われたことに対しても補償となるという父の言葉は、ガイに大きな影響を与える。そして「量的判断はあてはまらない」というフレーズは、三部作の最終部である *Unconditional Surrender* の根底を流れる思想となる。例えば同書の中盤部において、ガイは "'I can't do anything about all those others. This is just one case where I can help.'" (*SH* 624) と述べて、父親のいない赤ん坊を自分の養子とする。戦場の名誉欲とは離れた場所で、子供を一人救うことこそ、戦争中に人間の行う中で意義のある行動であったというウォーの考えが書かれる。

しかし終盤部で、そのガイがキリスト教徒として難民たちを救おうとしたとき、それは一人の、しかも最も親交を深めた女性に死なれてしまうという、聖書の説く善行とは正反対の結果になってしまう。ここには、政治的思惑の絡む戦場でキリスト教の善行を達成することがどれほど難しいかということを伝えようとする、ウォーの意図が読み取れる。あるいは、モーゼに自らをなぞらえたくなるほどの偉業は、カニイ夫人の言う名誉を満たすために戦争を望む心と同一であるという、ウォーの戒めも感じられる。

結論として、ウォーの軍事レポートや新聞への寄稿は、まずは彼個人の体験記録であり、戦場の現実を切り取ったものとして、取り扱う意義があると

考える。だが、それらを踏まえた上での *Unconditional Surrender* におけるウォーの視点の確立を見れば、彼の立場は軍人や論者であるより第一に小説家であり、小説作品にこそ彼の倫理が込められていると考えられる。その倫理とは、戦時の暴力が常に弱者に向けられることを強調し、さらに己の戦争体験をカトリックの立場から文学的な形で結晶させることであった。この倫理に、彼の戦後の戦争文学の重点があると言えよう。*Unconditional Surrender* で終結する *Sword of Honour* はその集大成として数えられるべきものと考察する。

本論文は、第 94 回日本英文学会全国大会での発表（2022. 5. 22 Online）に加筆したものである。

注

[1]『ユーゴスラヴィア現代史　新版』によれば、ユーゴはユーゴスラヴィアの省略形である（柴 i）。本論では以下、国名などの固有名詞に含まれているのでない限り、同書の表記方法と同じくユーゴという略称を使用する。

[2] ウォーの書いたレポートの原題は “Church and State in Liberated Croatia” である。現在は British National Archives FO 371/48910（“Position of Orthodox and Catholic Churches in Yugoslavia: relations between the churches in Yugoslavia and the Partisans. Code 92 File 1059 ”）に収められている。原文は本国でのみ閲覧可能なため、Sykes の伝記からの抜粋を用いた。

参考文献

Eade, Philip. *Evelyn Waugh: A Life Revisited.* Henry Holt and Company, 2016.

Gallagher, Donat, and Carlos Villar Flor. *In the Picture: The Facts behind the Fiction in Evelyn Waugh's Sword of Honour*. Rodopi, 2014.

Hastings, Selina. *Evelyn Waugh: A Biography*. 1994. Vintage, 2002.

McCartney, George. *Confused Roaring: Evelyn Waugh and the Modernist Tradition.* Indiana University Press, 1987.

Mojzes, Paul. “Religious Liberty in Yugoslavia: A Study in Ambiguity.” *Occasional Papers on Religion in Eastern Europe*, Vol.6, Iss.2, Article 2, April 1986, pp. 23-41.

Patey, Douglas Lane. *The Life of Evelyn Waugh: A Critical Biography*. 1998. Blackwell, 2001.

Sykes, Christopher. *Evelyn Waugh: A Biography*. 1975. Penguin, 1978.

Waugh, Evelyn. *The Diaries of Evelyn Waugh*. Ed. Michael Davie. 1976. Phoenix, 2009.（本論文では *DEW* と表記）

---. *The Essays, Articles, and Reviews of Evelyn Waugh*. Ed. Donat Gallagher. Little, Brown and Company, 1984.（本論文では *EAR* と表記）

---. *The Letters of Evelyn Waugh*. Ed. Mark Amory. 1980. Phoenix, 2009.

---. *Men at Arms*. 1952. Penguin, 2001.

---. *Officers and Gentlemen*. 1955. Penguin, 2001.

---. *Put Out More Flags*. 1942. Penguin, 2000.

---. *Sword of Honour*. 1965. Penguin, 2001.

---. *The Sword of Honour Trilogy*. Knopf, 1994.（本論文では *SH* と表記）

---. *Unconditional Surrender*. 1961. Penguin, 2001.

河合秀和 .『チャーチル　イギリス現代史を転換させた一人の政治家　増補版』. 中央公論新社 , 2018.

長島大輔 .「国家と宗教―ユーゴスラヴィアの例（1918-1991）」. *スラブ・ユーラシア研究センター* , 北海道大学スラブ研究センター , 2007 年 5 月 21 日 , src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/open/2007/nagashima.pdf. アクセス日 2022 年 11 月 16 日 .

柴宜弘 .『ユーゴスラヴィア現代史　新版』. 岩波書店 , 2021.